

学科 こどもの生活学科	所感
氏名 高田 由基	本学の学生に適した授業内容や方法が理解できてきた。しかし、指導方法やフォローが十分でない科目もある。随時、授業改善に取り組んでいく。

家政学部の教育目標は、本学の教育目標と教育方針の下、「真心・努力・奉仕・感謝」の四大精神の実践を通して社会的に自立して生きていく上で必要な①スキル・リテラシー・教養等に関する一般的知識・技能と②家政に関する専門的知識・技能と③建学の精神・社会人基礎力・pisa型学力を統合的に身に付け、社会に出てからは、これらの知識・技能をベースに生涯学習社会の中で自己の潜在能力をさらに開発しながら、職場と地域の課題解決に貢献できる人材を育成することである。

イ ライフスタイル学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、これからの社会の新しいライフスタイルのデザインを提案することによって、人々の日常生活を衣・食・住の面から支援することのできる人材を育成することである。

ロ 管理栄養学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、管理栄養士の資格を生かして、チーム医療、健康増進・疾病予防、食育・栄養指導又は健康をテーマにした食品の研究・開発等で活躍することによって、人々の日常生活を健康の面から支援することのできる人材を育成することである。

ハ こどもの生活学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の資格を生かして、こどもたちの学力および社会性・社会力の基礎・基本を育てることによって、人々の日常生活を子育ての面から支援することができる人材を育成することである。

1 教育の責任

2024年度は右に示す通り、こどもの生活学科を中心しつつ、管理栄養学科、ライフスタイル学科の授業科目を担当しました。こどもの生活学科の科目は、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭を目指す学生が資格取得、試験合格に向けて力をつけるための専門科目や共通科目です。自身の小学校教員としての経験や専門性を生かし、授業の内容、方法を工夫し、学生の学びが深まるような手立てをしています。

これらの授業科目の詳細（概要、学修内容、到達目標、評価方法、週ごとの学修内容など）については、添付資料1「2024年度シラバス」に記載しています。また、授業以外にも、就職指導、学生指導など、学生の成長を支援する様々な活動にも責任をもって取り組んでいます。

科目名	学科	開講期	受講者数	備考
基礎演習 A	こどもの生活	1年前期	35	卒業必修科目 初年次教育 オムニバス
基礎演習 B	こどもの生活	1年後期	35	卒業必修科目 初年次教育 オムニバス
専門演習 A	こどもの生活	3年前期	46	卒業必修科目 オムニバス
専門演習 B	こどもの生活	3年後期	46	卒業必修科目 オムニバス
体育科教育法(A)(B)	こどもの生活 A・B	3年前期	12・9	教職必修科目
健康運動実技 B	管理栄養	2年後期	39	資格必修科目
運動の科学	ライフスタイル	1年前期	37	共通科目
体育実技(A)(B)	管理栄養 A・B	1年後期	28・28	共通科目
アウトリーチ スタートアップ/I	家政学部	1年通年	14	共通科目
アウトリーチII	家政学部	2年通年	4	共通科目
他4科目				

2 教育の理念と目的

私の教育の理念は、学びの主体は学生自身であり、教師の役割はその学びを最大限に引き出す環境を整えることであると考えています。学生には、教科書や講義で得た知識だけでなく、自ら問題を発見し、主体的に解決する能力を身につけてほしいと願っています。そのため、授業ではできる限り学生が自ら考え、活動する時間を設け、常識にとらわれない視点を提供することで、学生の新たな気づきを促すように努めています。

各科目のシラバスに記載している成績評価は、学生の知識の習得だけでなく、授業への積極的な参加、課題への取り組み、社会人基礎力の向上なども総合的に評価する目的で行っています。提出されたレポートや課題に対しては、丁寧に添削を行いフィードバックすることで、学生の学びを深化させるように努めています。学生には、生涯にわたって学び続けることの重要性を理解し、それぞれの人生設計の中で「今なぜ何を学ぶのか」について、自分なりの意味づけを持って学んでほしいと考えています。

3 教育方法

2024年度の授業では、講義形式だけでなく、演習、グループワーク、ディスカッション、実技など、多様な教育方法を積極的に取り入れています。例えば、基礎演習では、ICTスキルを活用した情報収集・分析やレポート作成の演習、小学校や幼稚園の見学を実施しています。体育系の科目では、実技指導を中心に、ルール理解や他者との協力、運動観察とフィードバックなどを重視しています。体育科教育法では、グループワークによる教材研究や授業構想、模擬授業を行い、学生が主体的に考え、実践する力を養っています。

授業の際には、指定したテキストの他、必要に応じて文部科学省発行の資料などを参考に、視覚的な資料（スライド、動画など）も活用し、学生の理解を助けるように努めています。また、授業内での小レポートや課題レポートに対して、学生が手書きしたものをスキャンして示すことでフィードバックを行い、意見や疑問を共有し議論する機会を設けています。模擬授業においては、教員からの評価だけでなく、児童役になった学生からのフィードバックも行うことで、より実践的な学びとなるように工夫しています。

4 授業改善の活動

授業改善のため、2023年度の授業評価アンケートの結果を真摯に受け止め、2024年度の授業に活かしています。具体的には、学生からの「教員の説明は、明確で理解しやすかった」、「教員は、質問や相談ができるように配慮していた」などの高い評価を維持しつつ、自由記述欄に寄せられた意見や要望を参考に、授業内容や方法の改善に努めています。例えば、運動の科学の授業評価アンケートの自由記述では、「単語の意味などが難しいので、プリントにメモできるようにもう少し簡単に教えてほしい」という意見がありました。これを受け、2024年度の授業では、専門用語の説明をより丁寧に行い、板書や配布資料を工夫することで、学生の理解を深めるように努めています。また、授業期間終了後に得られるアンケート結果だけでなく、授業中にも学生の理解度を確認するための質問やリアクションペーパーなどを活用し、受講者のレディネスや実態に合わせた授業を行うように心がけています。私自身が教育者であり、研究者であり、生涯スポーツの実践者であり、保護者であるという多様な視点から、自身の活動を学生に示しながら、説得力のある授業を推進していきたいと考えています。

ランニング学会、体育科教育学会、本体育学会、そしてFD研修会などに積極的に参加し、教育改善の方策を学んでいます。また、他大学の先生との勉強会を定期的に設け、授業改善や研究について意見交換を行っています。

5 学生の授業評価

学生の評価は、各科目のシラバスに明示している通り、学期末試験、平常評価（レポート、小テスト、授業への貢献度など）、学修成果（単レポート課題、成果発表など）、学修行動（社会人基礎力）を総合的に行っています。例えば、基礎演習では各回に提出された課題、グループや個人での発表、専門演習では、卒業研究を見据えた質問紙調査やレポート、就職活動を見据えたレポートなどを中心に評価しています。授業評価アンケートの結果を見ると、多くの科目で「教員は、授業の成績評価基準を明確に説明していた」という項目において、学生から比較的高い評価を得ています。これは、シラバスでの丁寧な説明や、授業内での再度の説明によるものと考えています。

6 学生の学修成果

学生の学習成果を高めるために、授業内でのワークやグループ活動を積極的に取り入れ、学生が主体的に考え、議論し、発表する機会を多く設けています。これにより、最初は難しく思える内容でも、次第に学生の理解が進むような授業を意図しています。授業が進むにつれて、自律的に学び出す学生が見られるようになり、「初めは内容が難しく理解できなかったが、だんだんとわかるようになった」という声も聞かれます。

授業評価アンケートの結果からも、多くの科目で「あなたは、シラバスに記載されている学修の到達目標が達成できた」という項目に対し、「ややそう思う」「強くそう思う」と回答した学生の割合が高く、一定の学習成果が得られていると考えられます。また、レポート課題や成果発表を通して、学生は自身の学びを深め、獲得した知識や技能を表現する力を高めています。毎回提出されるレポートへの個別添削は、学生の学習意欲の喚起も繋がっていると感じています。

7 授業科目に関連した教材開発

学生の学習を支援するため、各授業のテーマに関連したオリジナルプリントや課題を作成し、配布しています。予習・復習においては、シラバスに記載された内容に基づき、テキストを読むことや関連情報を調査することなどを指示しています。特に、基礎的な科目においては、小テストや確認テストにおける学生の解答の傾向を詳しく分析し、それに基づいて誤答例や評価基準を作成し、公開しています。これは、従来の教科書だけでは内容を理解しにくい学生もいる現状を踏まえ、より丁寧な解説を提供するためです。専門科目においては、最新の研究論文や事例などを紹介し、学生の専門的な知識・技能の習得を支援しています。

8 指導力向上のための取り組み

指導力向上のため、学会、FD研修会に積極的に参加し、教育改善のためのヒントを得ています。月1回程度の頻度で、他大学の先生との勉強会を設け、授業改善や研究について意見交換を行うことで、自身の教育方法を多角的に見つめ直す機会を得ています。学外での取り組みとしては、小学校での授業や教員研修を行う機会にも恵まれ、実践的な指導力の向上に努めています。また2025年3月「持久走・長距離走この授業革命「つらいだけ」から「楽しい」への実践アイデア」(大修館書店)を刊行しました。今後は、これまでの教育・研究活動をさらに発展させるため、大学院博士課程への進学を考えており、最新の知識や研究動向を学び、学生指導に還元していきたいと考えています。

9 今後の目標

今後の短期的な目標としては、学生が主体的に学び、深い理解を得られるような授業をさらに展開していくことです。そのため、アクティブラーニングの手法をより効果的に取り入れ、学生同士の協働的な学びを促進するような授業設計を工夫していきたいと考えています。また、授業評価アンケートの結果や学生からのフィードバックを真摯に受け止め、継続的な授業改善に努めます。

長期的な目標としては、自身の専門性と経験を生かして、専門性、熱意、人間味のある有為な教育者を育成していくことです。特に、公立小学校教員採用試験の合格者数を増やすため、学生一人ひとりの個性や能力を伸ばし、頻繁な面談を通して、意識の低下や混乱がないようきめ細やかなサポート行っていきたいと考えています。

10 添付資料

添付資料1：シラバス、添付資料2：授業評価アンケート、添付資料3：学生が作成したレポート、発表資料、